

# 「メキシコ征服」再考<sup>1)</sup>

井 上 幸 孝

## はじめに

2021 年は、「メキシコ征服 500 年」を記念する年となった。メキシコ国内では、連邦政府によって「先住民の抵抗 500 年 (500 Años de Resistencia Indígena)」という標語が掲げられ、記念式典などが挙行された。さらに、メキシコ政府は、独立達成 200 年およびテノチティトラン創設 700 年も謳い、国や州など様々なレベルでの催しが行われた。また、学术界の側でも多くのシンポジウムや研究集会等が開催された<sup>2)</sup>。

こうした記念に際し、政府の「公式見解」と国民や学术界の見解が一致しないこともある。例えば、上述の「テノチティトラン創設 700 年」は、学術的には 1325 年もしくは 1345 年説が有力であるにもかかわらず、政府が 1321 年説を持ち出したことでメキシコの学界からはすぐさま反論が提示された<sup>3)</sup>。

本稿では、「公式見解」と歴史的事実およびその捉え方の間のずれを念頭に置きつつ、「メキシコ征服 500 年」が孕むいくつかの問題点を検討したい。最初に、「メキシコ征服」の歴史的経緯を簡潔にまとめたうえで、「メキシコ征服」が具体的に何を指すのかについて検討する。さらに、スペイン側とメソアメリカ側の歴史的文脈を考察し、現代から 500 年前の過去の出来事をどのように見つめ、位置づけるのかについて小考することとしたい。

## 1. 1519～21 年の歴史的経緯

2021 年が「メキシコ征服」から 500 周年とされるのは、スペイン人エルナ

ン・コルテス率いる軍がメシーカ人の王クアウテモクを捕らえ、テノチティトランを陥落させた 1521 年を起点とすることによる。この征服は、1521 年に突然起きたわけではなく、その数年前からの様々な経緯の末に起きた出来事だった。それゆえ、まずは 1519 年から 1521 年にかけての「メキシコ征服」の歴史的経緯を簡単にまとめておきたい。

1518 年 11 月にサンティアゴ・デ・クーバを出港し、1519 年 2 月にハバナ沖を離れたコルテス率いる探検隊は、同年 4 月にベラクルスに上陸した。この上陸までの間、コルテス一行はコスメル島やユカタン半島北部の沿岸、現在のタバスコ州からベラクルス州にかけてのメキシコ湾岸を航海し、その過程でマヤ系先住民とも接触している<sup>4)</sup>。ただし、この時がヨーロッパ人とメソアメリカ人の最初の接触というわけではなかった。カリブ海の探検・征服を進める中、キューバ（クーバ）島<sup>5)</sup>を征服したスペイン人は、1518 年までにユカタン半島沿岸部やメキシコ湾岸に二度にわたり探検隊を派遣していた。そのため、メソアメリカ先住民との接触は、1517 年のフランシスコ・エルナンデス・デ・コルドバやその翌年のフアン・デ・グリハルバによる探検の際にも起きていた<sup>6)</sup>。

サン・フアン・デ・ウルーアに上陸し、ビジャ・リカ・デ・ベラ・クルスの町<sup>7)</sup>を創設したコルテスらは、「ムテスマ」<sup>8)</sup>を君主とする「クルーア」という大国についての情報を得た<sup>9)</sup>。こうして、彼らはテノチティトランを目指して進軍することを決意する。その行程では、トラスカラ（トラシュカラ）と同盟を結んだり、チョルーラ（チョロラン）で容赦ない虐殺を行ったりした。1519 年 11 月、スペイン人の一行はテノチティトランに達した。コルテスは、陸地とテノチティトランを結ぶ湖上道のうちの一つで、テノチティトランの王モテクソマ・ショコヨトルとの初対面を果たした。そして、テノチティトランに平和裏に迎え入れられたコルテス一行は、まもなくモテクソマ・ショコヨトルを幽閉した。

事態が大きく動いたのは、翌 1520 年に入り、コルテスを追跡してパンフィロ・デ・ナルバエスがベラクルスに到達して以降のことであった。ナルバエスは、キューバ総督ディエゴ・デ・ベラスケスの出港停止の命令を無視して探検に出たコルテスを追ってきたのだった。

コルテスはペドロ・デ・アルバラードにテノチティトランでの指揮を任せ、いったんベラクルスに向かった。結局、コルテスはナルバエス麾下のスペイン人の大部分を懐柔してテノチティトランに戻ったものの、その間にテノチティトランでは深刻な事件が起きていた。アルバラードらが、メシーカ人の守護神ウィツィロポチトリに捧げられたトシュカトルの大祭を襲撃したのである。祭礼の最中、丸腰の状態で奇襲を受けたメシーカ人の怒りは高まった。その結果、コルテス軍とメシーカ人の関係は、一触即発と言えるものになっていた。

テノチティトランに留まることに危険を感じたコルテス一行は、6月30日の深夜、密かに脱出を試みた。だが、脱出の試みはすぐさまメシーカ人に気づかれ、激しい戦闘となった。同日から翌7月1日にかけての戦いは、多くの同胞を失ったコルテスが、テノチティトラン脱出後に対岸のアウエウェテ（メキシコラクウショウ）の大木の下で涙を流したという挿話から「悲しみの夜」と呼ばれる。この戦闘はメシーカ人の大勝利に終わった。スペイン人は約半数が命を落とし、コルテスら生存者たちは命からがら同盟都市のトラスカラ



写真1：ベラクルス湾とサン・フアン・デ・ウルーア要塞。井上幸孝撮影（2019年、ベラクルス州ベラクルス市）



写真2： Cholulaの大ピラミッド跡。井上幸孝撮影（2012年、プエブラ州Cholula・デ・リバダビア行政区）



写真3:「悲しみの夜」の挿話に登場するアウェウエテの樹の跡。井上幸孝撮影(2022年、メキシコ市ミゲル・イダルゴ区)



写真4:メキシコ市憲法広場(ソカロ)のクアウテモク像。井上幸孝撮影(2022年、メキシコ市クアウテモク区)

まで退却した。

その後、翌1521年にかけて同盟者を増強し、軍勢を整えたコルテス軍は、同年5月にテノチティトラン包囲戦を開始した。「悲しみの夜」の直前の動乱の中、メシーカ人の王モテクソマ・ショコヨトルは死去していた<sup>10)</sup>。その後を継いだクイトラワクも三か月ほどで病に倒れたため、この包囲戦は新王のクアウテモクが中心となって戦われた。テノチティトランはいくつかの湖上道のみで陸地と結ばれており、スペイン人のみならず大軍勢の先住民連合軍を敵に回したメシーカ人は三か月にわたる包囲戦に苦しんだ。そして、聖ヒッポリトゥスの祝祭日に当たる8月13日、クアウテモクは捕えられ、戦いは終結した。

## 2. 「メキシコ征服」の「メキシコ」が指すもの

現在、「メキシコ」(スペイン語「メヒコ México」)と言えば、メキシコ合衆国 Estados Unidos Mexicanos という国を思い浮かべるのが一般的である。しかしながら、その語源となったナワトル語地名(メシコ Mexico, Mexihco)は、

テノチティトランおよびトラテロルコが位置したテツココ湖中の島を指すものである<sup>11)</sup>。「メキシコ征服」という際のメキシコがメシコを指すと理解するのか、それともメキシコ合衆国（あるいはそれに類似した地理的広がり）を指すと理解するのかによって、「メキシコ征服」が意味する内容は大きく異なる。

1521 年 8 月に陥落したのは、メシコだった。すなわち、2021 年に 500 周年が記念された「メキシコ征服」は、テノチティトランないしはアステカ王国支配の核心となる地域の征服であったということであり、現在のメキシコ合衆国どころか首都メキシコ市のごく一部の征服だったと言える。この理解に基づくならば、現在のメキシコ国内の他地域の征服——例えば、ミチョアカンの征服、オアハカの征服、エル・バヒオの征服、チアパスの征服——は、「メキシコ征服」の中には含まれないと考えられる。

事実、メキシコやメソアメリカの各地に征服が拡大したのは、1521 年よりも後のことだった。ここではミチョアカンとユカタン半島の二か所についてのみ簡潔に見ておくことにしたい。

ミチョアカン王国（タラスコ王国、プレペチャ王国）<sup>12)</sup> は、メシコ包囲戦の段階でメシカ人の協力要請を打診されるなど、スペイン人の到来について情報を得ていた。テノチティトラン陥落後、この王国の王（カソンシ）だったタンガショアン・ツィンツィチャ（タンガショアン 2 世）は、コヨアカンにいたコルテスに使者を派遣している。1522 年にはクリストバル・デ・オリー率いる軍がミチョアカン地方に達し、いったんはタンガショアン・ツィンツィチャがスペイン支配を受け入れた。しかし、1529 年にアウディエンシアの長官だったヌニョ・デ・グスマンがこの王を処刑すると、プレペチャ人は激しい武力抵抗を示した。1533 年に「タタ・バスコ」として知られるバスコ・デ・キローガが派遣され、ようやくこの地域の安定を築いた。さらに、1540 年代にはスペイン人の都市（現モレリア）<sup>13)</sup> も建設されて支配も安定化していった。このように、ミチョアカン地方の征服は、テノチティトラン征服からおよそ 10 年以上遅れて実質的になされたと言える。

ユカタン半島に関しては、メキシコ市を拠点とする遠征隊が征服活動を行ったわけではなかった。スペイン国王の命を受けたフランシスコ・デ・モ

ンテホが 1527 年にコスメル島を経て上陸し、複数の軍事行動を展開した。1542 年にはこの人物の同名の息子がスペイン人の中心都市となるメリダを創設し、1547 年にはディエゴ・デ・ランダを含む宣教師が上陸した<sup>14)</sup>。この頃、すなわち 1540 年代にはユカタン半島北部の征服が一段落したとされる。だが、先住民による反乱は絶えなかったうえ、内陸へと逃げた人々の拠点タヤサルは長らく抵抗を続けた。このように、ユカタン半島北部の征服が一段落するのは 1540 年代で、テノチティラン陥落から 20 年以上後のことであった。さらに、内陸のタヤサルをスペイン人が攻略したのは 1697 年のことで、はるか後のことだった。

以上のように、1521 年の征服は、メソアメリカ文明圏の中の極めて限定的な範囲の征服であったことが確認される。つまり、「メキシコ征服」という呼称は、現在のメキシコ合衆国に概ね該当する範囲のスペイン人による征服を連想させるものの、その実態はまったく異なっていた。

なお、これに関連して、現在のメキシコ合衆国領に該当する明確な地理的区分の歴史上の不在も確認しておく必要があるだろう。1535 年に設置され、植民地時代末期まで拡張を続けたヌエバ・エスパーニャ副王領には、時代によってその範囲が変化したものの、現在のメキシコの国境線で区切られるものではなかった。ヌエバ・エスパーニャ副王領には、アメリカ合衆国のカリフォルニア州からテキサス州にかけての地域、フロリダ半島、カリブ海のスペイン領の島々、パナマを除く中米の大部分（現在のグアテマラ、ホンジュラス、エルサルバドル、ニカラグア、コスタリカ）、さらには東南アジアのフィリピン諸島やその東側に位置するスペイン領の島々（グアム島など）などが含まれた。ヌエバ・エスパーニャ副王領に含まれることとなった各地の征服は 16 世紀のみならず、17 世紀以降も長期間にわたって続いた。

### 3. 「征服」における征服者と被征服者

「メキシコ征服」をめぐるもう一つの問題は、誰が勝者すなわち征服者で、誰が敗者すなわち被征服者であったのかという点である。というのも、かつては征服戦争の勝者はスペイン人で、敗者は先住民（インディオ）という前

提で議論されるのが一般的だったが、現在ではこうした単純な二項対立に疑問を差し挟む研究成果が出されるようになったからである。

20 世紀中葉までの研究では、主にスペイン人が残した史料をもとに征服の歴史が再構築された。スペイン側の記録としては、エルナン・コルテスの『報告書簡』やベルナル・ディアス・デル・カスティージョの『ヌエバ・エスパニャ征服の真実の歴史』を筆頭に征服者の証言がある（コルテス 2015；ディエゴ・デル・カスティーリョ 1986-87）。さらには、新大陸への渡航経験はないものの、一次情報を利用してスペインで編まれたアントニオ・デ・エレーラやフランシスコ・ロペス・デ・ゴマラらの歴史書も存在する（López de Gómara 1979a; López de Gómara 1979b）。さらには、宣教師や官吏など征服後に現地に入った者たちが征服や現地社会に関して著したクロニカも多く残されている<sup>15)</sup>。

しかし、その一方で先住民の血を引く子孫たちが 16 世紀や 17 世紀初頭に征服について書いた記録も複数存在する。1959 年、メキシコの歴史学者レオン＝ポルティージャは『敗者の視点——先住民による征服の報告』と題した先住民史料のアンソロジーを出版し、先住民側から見たアステカ征服史という視点を唱えた（レオン＝ポルティージャ 1994）。同書には、ディエゴ・ムニョス・カマルゴの『トラスカラ史』、エルナンド・デ・アルバラード・テソモクの『クロニカ・メヒカーナ』、先住民情報をフランシスコ会士サアグンが編んだ『フィレンツェ文書』、フェルナンド・デ・アルバ・イシュトリルショチトルの『第 13 報告書』、ドミンゴ・チマルパイン・クアウトレワニツィンの『第 7 報告書』、作者不詳の『トラテロルコ年代記』などの一部が収められた。さらに、レオン＝ポルティージャは、1964 年に『征服の裏側——アステカ人、マヤ人、インカ人による報告』でこの手法をマヤとインカにまで広げた（León-Portilla 1964）。これ以降、先住民の血を引く者たちが書いた史料は、スペイン側の記録とは異なる見方を示すものとして重視されるようになった。

レオン＝ポルティージャが唱えた「敗者の視点」は、伝統的な征服史研究とは正反対の観点の存在を広く知らしめたという点で革新的であった。事実、20 世紀後半には、ボドとトドロフの『アステカの征服物語』に代表されるように、先住民の視点とスペイン人の視点を対比させることが一般的となった

(ボド／トドロフ 1994)<sup>16)</sup>。レオン=ポルティージャの師であったガリバイ・キンタナから続く先住民史料の再評価を大きく前進させたことは、レオン=ポルティージャの大きな功績であった。

とはいえ、その一方で、「敗者の視点」という表現が誤解を生じさせるものだったことも事実である。レオン=ポルティージャ自身は、アンソロジー『敗者の視点』にテツココやトラスカラの先住民の見地を取り入れており、コルテスと同盟した先住民の観点があったことを十分に意識していた（レオン=ポルティージャ 1994 : 14-16）。しかしながら、「敗者」という表現そのものが「先住民=敗者」という先入観を与えがちで、「視点」という語が単数形であったことも先住民の見方が単一であったかのような印象を与えることにつながってしまった。

先住民の中には勝者も含まれていたことが目立った形で議論されるようになったのは、今世紀に入ってからである。2007 年に出版された研究書『インディオ征服者——メソアメリカの征服における先住民同盟者たち』<sup>コシキスタドル</sup>の序章で、歴史学者シュロダーは、英語圏の出版物を基に征服史研究の動向を四つに分類している（Schroeder 2007）。彼女によれば、一つめは、19 世紀中葉に出版されたプレスコットの『メキシコ征服史』に代表されるような「スペイン人による英雄的な征服」という征服史の見方である。二つめは、フランス人研究者リカルが唱えた「魂の征服」、すなわち軍事的征服に続くキリスト教化という観点である。三つめは、「敗者の歴史、ないしは何も起こらなかった出来事としての征服」で、スペイン人による征服を歴史の転換点としては扱っていない先住民史料の観点に着目するものである。そして、第四の征服史の見方としてこの研究者が挙げているのが、「征服者としてのインディオ」である。実際、上述の研究書（Matthew and Oudijk 2007）に収められた論文には、トラスカラやクアウケチョランの先住民の見方、メキシコよりも南に位置する中央アメリカ征服におけるナワ人・サポテカ人・ミステカ人の存在、ヌエバ・ガリシア地方やユカタン地方の征服における先住民の役割などに関するものが含まれる。

スペイン人から見れば協力者や同盟者であった先住民が主体的な征服者になった点に関連して、「異教徒を服従させるキリスト教徒」という観点があつ



たものと思われる。一例を挙げると、現ケレタロ州の州都であるサンティアゴ・ケレタロ市の創設にまつわる史料の中には、ニコラス・デ・サン・ルイス・モンタニェスという人物が創設者だと主張する一連の文書がある（Frias 1906: 61-98）。この史料の記述によれば、オトミー先住民であるサン・ルイス・モンタニェスの軍は「野蛮なチチメコ人」を打ち負かし、その際には聖ヤコブが出現して奇跡を起こしたという<sup>17)</sup>。こうした言説は、先住民かスペイン人かではなく、キリスト教徒か異教徒かを重視するものと言える。そこでは、前者がキリスト教徒が征服者ないしは勝者で、異教徒が被征服者すなわち敗者という図式が成立しているように思われる。

#### 4. スペインから見た「メキシコ征服」

スペインもしくはヨーロッパ側から見た「メキシコ征服」の位置づけは、西洋中心主義的な思考に基づいて構築されてきた伝統的な世界史像に投影されてきた。すなわち、15世紀以降、ヨーロッパの航海者・探検者たちが前人未到の「発見・征服」の時代を切り開いていったという見方である。

スペインにとっては、1492年のクリストバル・コロソ（コロンブス）による「発見」がその嚆矢となった。以降、エスパニョーラ島を拠点としたカリブ海地域の征服と植民、大陸部への進出とスペインの海外領は急速に拡大していった。そうした経緯の中で1521年の「メキシコ征服」は、1533年のインカ帝国の征服、1565～71年のフィリピン征服と並ぶ重要な出来事であった<sup>18)</sup>。スペインは、メキシコに達する以前に、大陸の一部であるカステーリャ・デル・オロ（現在のパナマ付近）に入植を行ってはいたものの、「メキシコ征服」はアメリカ大陸部への最初の本格的な進出であり、まとまった国家を最初にスペイン支配下に置く結果をもたらしたものであった。

19世紀初頭に各地で独立運動が起き、主要なラテンアメリカ諸国が独立を果たすまでに、スペインは南北アメリカ大陸にまたがる広大な領土を手に入っていた。何千年も前から独自文明が開花していたメソアメリカとアンデスにおいて、それぞれアステカ王国とインカ帝国を征服したことは、スペインによる領土獲得を象徴する出来事だった。事実、16世紀に設置された二つの副

王領の中心は、これら二つの地域それぞれに置かれた。ヌエバ・エスパーニャ副王領の中心はテノチティトランを破壊して建設されたメキシコ市であり、ペルー副王領の中心は、インカ帝国が栄えた中央アンデスの海岸に近いリマとなった<sup>19)</sup>。

このようなスペイン帝国確立の過程という観点からすると、アステカ王国（ないしはアステカ王国中核部）の征服を「メキシコ征服」と呼び、インカ帝国の征服を「ペルー征服」と言い換えることは、さほど不自然には見えない。実際、後にメキシコ合衆国領となった地理的範囲は、1521 年以降、スペイン支配が続いた 19 世紀初頭までのいずれかの時点でスペインの支配地となったわけであり、その契機となったテノチティトラン攻略を「メキシコ征服」と呼ぶのは、スペイン側の観点からはさほど問題にならないのだろう。

しかしながら、1521 年の時点で存在していなかったメキシコという国家の範囲を歴史的に遡及し「メキシコ征服」と呼ぶのが不正確で時代錯誤の捉え方であることは否定できない。そこで、次はその当時のメソアメリカ側の状況について見ていくこととしたい。

## 5. アステカ王国支配と「メキシコ征服」

「アステカ王国」すなわちテノチティトラン、テツココ、トラコパンの三都市同盟を基盤とした支配体制は、メソアメリカ後古典期の歴史的・社会的文脈を念頭に置いて理解する必要がある。三都市同盟による支配というものは、15 世紀前半に突如現れたシステムでもなければ、テノチティトランのメシーカ人が考え出した政治体制というわけでもなかった。三都市が同盟を結び政治的安定を図るという支配のあり方は、後古典期のメソアメリカ各地に見られた現象であった<sup>20)</sup>。メキシコ盆地とその周辺に関しては、トルテカ文化の中心地だったとされるトゥーラ（トーラン）もそうした複数都市の支配の一翼を担ったとする史料すらある<sup>21)</sup>。

15 世紀初頭のメシーカ人は、アスカポツァルコに従属していた。後発の集団としてメキシコ盆地に到来した彼らは、14 世紀前半にテノチティトランを建設し、アスカポツァルコの支配下で実績を積み、14 世紀後半には独自の王

（トラトアニ）を持つ都市国家（アルテペトル）としての立場を確立していた<sup>22)</sup>。

「アスカ王国」成立前には、クルワカン、テツココ、アスカポツァルコから成る三都市同盟が存在していた。そして、これら三都市のうちアスカポツァルコが絶大な権力を有するに至った。老王テソソモク治下で支配を拡大したアスカポツァルコによって、1418 年、同盟都市テツココの王であったイシュトリルショチトルは暗殺された。1426 年もしくは 1427 年にテソソモクが死去すると、アスカポツァルコ王位をめぐる争いが起きた。テソソモクは後継者を指名しなかったとされ、嫡子のタヤウ（タヤツィン）が継承しようとしたところ、コヨアカンを治めていた異母兄弟のマシュトラが力で王位を手に入れた。即位したマシュトラは、以前からメシーカ人の勢力拡大を懸念しており、これを弱体化させようとした。先王テソソモクの孫で、テソソモク治下で優遇されていたテノチティトラン王チマルポボカとその息子テウェトレワクを暗殺し、さらには同じくメシーカ人の都市であるトラテロルコの王トラカテオツィンも殺害した<sup>23)</sup>。こうした経緯の末、メシーカ人のみならずメキシコ盆地の多数の都市国家がアスカポツァルコに対する抵抗勢力となった。1428 年、テノチティトランとトラテロルコ、テツココ、クルワカンなどの勢力が結集して戦争を仕掛け、アスカポツァルコは滅亡した<sup>24)</sup>。アスカポツァルコ敗北後、1420 年代末ないしは 1430 年頃に新たな政治秩序として確立されたのが、テノチティトラン、テツココ、トラコパンによる三都市同盟だった。

新たな三都市同盟の成立からおよそ 90 年後、コルテス一行が到来した。この間に三都市の力関係は大きく変化しており、テノチティトランが明らかに優勢となっていた。対アスカポツァルコ戦争において重要な役割を果たした王ネサワルコヨトルが 1472 年に死去した後、古都テツココは次第に弱体化していった。その息子である後継者ネサワルピリが 1515 年に死去した際には、テノチティトランの王であるモテクソマ・ショコヨトルの甥であるカカマがテツココ王に即位した。この後継者選びは、メシーカ人の影響力が強まったことを顕著に示しており、テツココ側の史料にはカカマが「傀儡王」だったとするものもある（井上 2018 : 168-169）。その一方で、テノチティトランは

破竹の勢いで権力を増強することとなった。メシーカ人による外地への征服活動は、15世紀半ばから急速に推進された。テツココやトラコパンの支配地に比べ、テノチティトランの征服地は、16世紀初頭にははるかに広い範囲に及んでいた。

このように、スペイン人到来時のテノチティトランは、15世紀前半のアスカボツアルコと同様、三都市同盟の中で一都市が圧倒的な権力を持つという状況にあった。長年の敵対者であったトラスカラ人のみならず、15世紀中葉にメシーカ人に征服されたチャルコ人などテノチティトランの被支配民、さらには同盟都市テツココで反カカマの立場をとる貴族層といった多様な先住民の集団が自発的にテノチティトラン征服に参画するのは、何ら不自然なことではなかった<sup>25)</sup>。これら先住民諸集団は、おそらくはテノチティトラン滅亡後の新たな政治的秩序の中で新たな役割を果たすことを期待していたものと考えられる。

このように、スペイン人がやって来た当時のアステカ王国の内部やトラスカラのような隣接地域には、テノチティトラン支配に不満を持つ集団が多く存在した。だが、こうした多様な集団の存在は、「先住民」や「インディオ」という表現で括られ、スペイン人と対比されることで、しばしば等閑視されてきた。加えて、先住民の多様性はメソアメリカの領域全体に目を向けるとさらに多様であることがわかる。そこで、次はメソアメリカ全体を視野に入れてその多様性について考えてみたい。

## 6. メソアメリカとヨーロッパ

2.で見たように、1521年の「メキシコ征服」の実態は、アステカ王国中核部に相当する地域の征服だった。16世紀初頭のアステカ王国の支配領域がメソアメリカの歴史において例外的に広域だったことは事実である。しかし、メソアメリカ地域全体からすれば、あくまでその一部分に過ぎなかった。アステカ王国の西側には上述のミチョアカン王国が存在していた。ユカタン半島にはアステカ支配とは関係のない多くのマヤ諸領が存在していた。メソアメリカの範囲は、現在のメキシコ国境を越えて中米にも及び、グアテマラ高

地にはマヤ系のキチェ人やカクチケル人の王国があった。

このメソアメリカの多様性は、4.で扱ったスペイン側の視点ではしばしば等閑視されてきた。「スペインがメキシコを征服した」、「メソアメリカはスペイン領の一部となった」といった表現をする時、「メキシコ」や「メソアメリカ」はスペインと対比される。しかし、スペインの地理的広がり、メキシコないしはメソアメリカという地理的広がり、そもそも同じスケールで論じられるものなのだろうか。現在のスペインとメキシコの国土面積を比較するだけでも、メキシコはスペインの四倍近い大きさである<sup>26)</sup>。スペイン国内には様々な言語が存在するが、大部分は同系統に属する言語である。これに対し、メキシコ国内に現存する先住民言語は11の語族に属する68言語に上る<sup>27)</sup>。このような地理的広がり、16世紀にスペイン人が初めて達したメソアメリカは、スペインやイベリア半島というよりも、西ヨーロッパやヨーロッパと比較される規模と多様性を有していたと言える。

実際、ミチョアカン王国の中心都市ツィンツァンからカクチケル王国の中心都市イシムチュの直線距離は1200 km強で、これは概ねローマ-アムステルダム間やパリ-ブダペスト間の距離に該当する。ユカタン半島のトゥルムとメキシコ西部のコリマの間は、直線距離で約1700 km離れており、バルセロナ-コペンハーゲン間やジュネーヴ-アテネ間の距離とほぼ同じである。メキシコ中央部のトラスカラとユカタン半島のチチェン=イツァの間の距離は、直線距離で約1000 kmで、マドリード-パリ間とほぼ同じである。

歴史上、ヨーロッパ内に様々な国や集団が存在し、それらの間で同盟や友好関係、対立や戦争が幾度となく繰り返されたことは周知の通りである。言い換えれば、イングランド人とスペイン人、フランス人とゲルマン人は、ある程度の文化的基盤を共有しつつも、一枚岩の「ヨーロッパ人」だったわけではない。これに対し、メソアメリカ先住民や、場合によっては南北アメリカ大陸の先住民は、あたかも一枚岩のまとまった集団であるかのようにしばしば認識されてきた。こうした見方の背景にあるのは、大航海時代のヨーロッパ人の他者認識である。とりわけ、「インディオ」と「アメリカ」という概念は、後世に強い影響を与え続けてきたと考えられる。

「インディオ」（英語インディアン）は、インディアスの住民を意味する。

インディアスという地理的な概念は、元々はインド以東のアジアを指す漠然とした呼称だった。コロンの航海以降、南北アメリカやカリブ地域もインディアスの一部とされたことから、その住民もインディオと総称されることになった<sup>28)</sup>。

「アメリカ」という大陸名は、メキシコ人史家オゴルマンが論じたように、16世紀初頭に「発明」された概念であった（オゴルマン1999）。当時のヨーロッパ人にとって、大西洋の彼方に新たに現れつつあった陸塊は、その形状も十分にわからぬまま「アメリカ」と命名された。そこに北アメリカ大陸と南アメリカ大陸の区別はなく、メソアメリカ文明とアンデス文明の混同を生み出す要因の一つともなった。

このように考えると、16世紀にヨーロッパ人が初めて接触したメソアメリカという地理的範囲は、スペインのようなヨーロッパの一部分ではなく、ヨーロッパそのものと同等の規模で捉えられる必要があるのではないだろうか。そうであるならば、「アステカ王国の征服」は、せいぜい「スペイン王国の征服」や「イングランドの征服」に該当する規模のものに過ぎなかったことになる。当然ながら、スペインやイングランドが征服されたとしても、それは「ヨーロッパの征服」と同義ではない。そこに存在する政治的・文化的多様性を無視して安易に「メソアメリカ」と一括りにすることは、根拠もなく「ヨーロッパ」を一括りにすることと大差ない<sup>29)</sup>。こうした観点からの捉え直しが、今後は必要とされるのではないだろうか。

## 7. 「メシーカ人中心主義」の歴史観

他方、異なる次元の問題がもう一つ存在することも忘れてはならない。それは、現代メキシコにおける過去への眼差しのあり方である。本論を結ぶ前に、この点について簡潔に問題点を指摘しておきたい。

本稿の冒頭で述べたように、メキシコ連邦政府は2021年をテノチティラン創設700年と位置づけ、メキシコ征服500年や独立達成200年と併せて記念しようとした。テノチティラン攻防戦に終止符が打たれた8月13日には、憲法広場（ソカロ）で記念式典が催された。新型コロナウイルス感染症の流行のため、

出席者はごく限られた人数に限定されたものの、メキシコ合衆国大統領ロペス・オブラドール、メキシコ市長シェインバウム、先住民族の代表者らが列席した式典の様子は各種メディアで生中継された。この式典が実施されたメキシコ市の憲法広場(通称ソカロ)



写真 5: 憲法広場に設置されたテノチティラン大神殿のレプリカ。

柳澤佐永子撮影 (2021 年、メキシコ市クアウテモク区)

には、その際、高さ 16m のテノチティラン大神殿のレプリカも設置されていた。メキシコ政府が掲げる「先住民の

抵抗 500 年」の「先住民」は明らかに、この神殿を建造した人々、すなわちメシーカ人なのである。コルテス軍とともにテノチティラン陥落を実現させたトラスカラ人、テツココ人、チャルコ人といった「勝者」で「征服者」の先住民は、暗黙の裡にその存在が隠蔽されてしまっている。さらに、マヤ人をはじめ、アステカ支配の及んでいなかった地域の先住民にとって、テノチティラン大神殿が何の関係もないシンボルであることは言うまでもない。

メシーカ人中心主義とでも言うべきこのような「先住民」像は、現政権が作り上げたものではない。それどころか何世紀にもわたって積み重ねられた結果が、このような偏った先住民像である。メキシコが独立する以前、植民地時代中期から後期のクリオーリョの古代文明観には、既にアステカ王国の偏重が見られた。独立後の政治家や研究者の間にも「メシーカ人中心主義」は引き継がれ、スペイン人到来以前の先住民と言えばメシーカ人を連想するといった見方が続いてきた。「裏切者トラスカラ人」や「売国奴マリンチェ」といった言説は、こうしたメシーカ中心主義の裏返しにほかならない<sup>30)</sup>。

現在の先スペイン期研究や植民地時代先住民史の研究では、かつてのような単純で露骨なメシーカ人中心主義は克服されている。しかしながら、17～18 世紀以降、どのようにメシーカ人中心の歴史観が醸成され、19 世紀以降の

国家の歴史の中で位置づけられていったのかは、まだ十分に研究されているとは言えない。マヤ文化やオアハカ文化などではなく、メキシコ中央高原の文化が近代メキシコ国家の直接的な「祖先」とされた歴史的な背景と経緯の詳細は、今後の歴史研究の進展による解明が待たれるところである<sup>31)</sup>。

## おわりに

本稿では、征服に関する歴史的経緯を見たうえで、「メキシコ征服」が指すものとは何かについて考察した。そして、メキシコ征服やテノチティラン征服、あるいはアステカ王国征服と呼べる出来事が「メキシコ征服」とされた理由として、4.で考察したヨーロッパ側の見方が背景にあると考えられることを指摘した。その一方で、西洋側の見方とは異なる前提や歴史的文脈を考慮する必要があることも検討した。3.では征服者がスペイン人だけではなかった点、5.と 6.ではメソアメリカ側の文脈について見た。こうしたメソアメリカ側からの理解や解釈は、従来の西洋側の見方を全面的に否定するものではない。むしろ双方を考慮したうえで、世界史像の見直しにつなげる必要があると筆者は考える。さらに、7.では、今後さらに解明が求められるテーマとして、メキシコにおけるメシーカ人中心主義な見方の問題があることを指摘した。

以上のように、500 周年を機に「メキシコ征服」を再考することは、西洋側の視点から構築されてきた世界史像を改めて考え直す契機となり得る。また、メシーカ人中心の古代文明観を検証し、見直すきっかけを与えてくれる。500 周年のような記念年は、政治的・文化的イベントが相次ぐ「お祭り」となりがちである。1992 年、コロンの航海から 500 周年を迎えた時にも確かにそうした傾向は見られた<sup>32)</sup>。しかしながら、記念する歴史的出来事について、旧来の見方をただ無批判に繰り返すことは避けなければならない。むしろ、従前の歴史観について積極的に検証し、既存の見方を考え直したり新たな観点を導入するための絶好の機会となり得ることを忘れてはならない。現役のメキシコ史研究者として今回の節目の年を迎えられたことに感謝しつつ、500 周年を機に改めて熟考や見直しが必要と判明した事象、とりわけアステカ王



国中心の古代史像が形成されるに至った過程について、一つずつ明らかにしていくことを今後の課題としたい。

## 注

<sup>1)</sup> 本研究は、令和 3 年度専修大学特別研究員（特例）の成果の一部である。本稿は、モレロス州大学院大学の講演会（2021 年 10 月 22 日）、メトロポリタン自治大学主催の XIII Encuentro Internacional de Historiografía（2021 年 11 月 3 日）で口頭発表した内容、ならびにメトロポリタン自治大学から出版された論考（Yukitaka Inoue Okubo, “La conquista de México: una reflexión a 500 años”, en Héctor Cuauhtémoc Hernández Silva (coord.), *Conmemorar, recordar, investigar. Las fechas-marca cívicas e históricas a inicios del siglo XXI*, México, Universidad Autónoma Metropolitana-Azcapotzalco, 2022, pp. 31–41）を発展させ、新たな知見と考察を加えて日本語で書き下ろしたものである。在外研究の機会をいただいた専修大学、コロナ禍にもかかわらず研究員として受け入れてくださったメキシコ国立自治大学歴史学研究所（Instituto de Investigaciones Históricas, Universidad Nacional Autónoma de México）に感謝したい。

<sup>2)</sup> 筆者自身もそのいくつかに参加した。メキシコ司教会主催の国際会議（Congreso Internacional: Cinco Siglos de la Iglesia Católica en México）、メキシコ政府のメキシコの歴史文化の記憶部会主催の公開討論会（Conversatorio: Escenarios y protagonistas de la conquista de México-Tenochtitlán）、テスココ司教区主催の国際会議（Congreso Internacional: 500 años del encuentro entre acolhuas y españoles）に発表者として参加したほか、メキシコ国立自治大学の Noticonquista（<https://www.noticonquista.unam.mx/>）への寄稿、モレロス州大学院大学やイダルゴ州歴史文化研究所主催の講演会への登壇などの機会を得た。

<sup>3)</sup> その例として、考古学者マトス・モクテスマによる「テノチティトランが創設されたのは 700 年前ではない」という Milenio 紙の記事（<https://www.milenio.com/cultura/arte/tenochtitlan-fundo-700-anos-eduardo-matos>, 最終閲覧日 2023 年 1 月 6 日）、マルティネス・バラクスによる Letras Libres 誌の記事「2021 年におけるメキシコ市創設 700 年記念について」（<https://letraslibres.com/historia/acerca-de-la-conmemoracion-en-2021-de-los-700-anos-de-la-fundacion-de-la-ciudad-de-mexico/>, 最終閲覧日 2023 年 1 月 6 日）を参照されたい。

<sup>4)</sup> 例えば、1519 年 3 月には現タパスコ州のグリハルバ川の河口付近で同地の先住民と接触し、戦闘を行った。聖ヤコブが奇跡的に出現してスペイン軍を助けたとされるこの「セントラの戦い」については、田辺・大原・井上（2022：267-312）を参照。

<sup>5)</sup> この島（フアナ島）へは、最初にコロンの達していたが、本格的な征服・植民地化はディエゴ・ベラスケスによって 1511 年から進められた。

<sup>6)</sup> エルナンデス・デ・コルドバを隊長とする一行は、ユカタン半島東岸のイスラ・ムヘーレスや現キンタナ・ロー州沿岸部に達したほか、同半島西岸のカンペチェやチャンボトンなどの住民とも接触した。この探検隊および翌 1518 年のグリハルバを隊長とする探検隊については、いわゆる『第一書簡』（ビジャ・リカで 1519 年に作成された報告書）にもその概要が記されている（コルテス 2015：6-15）。

<sup>7)</sup> 1519 年 4 月 22 日付で創設が宣言され、参事会や市長が任命された。当初、ベラクルスの町が置かれたのは、現在のベラクルス市の北 60 km ほどの場所（現ビジャ・リカ）だったとされる。この町は、1523 年に現在のラ・アンティグアに移転した後、1599 年に再移転し、現在のベラクルス市となった。

8) コルテスの『報告書簡』では、メシーカ人の王（テノチティトラン王）のモテクソマ・ショコヨトル（在位 1502～19 年）は、ムテスマと表記されている。また、メシーカ人とその王国については、しばしば「クルーア」（元来はクルワカンの人々を意味する語）と表現されている（コルテス 2015 : 52-53, 55, 61, 93ss）。

9) ベラクルス上陸までに、コルテスは現地先住民との意思疎通を可能とする二人の通訳を手に入れていた。一人は、1510 年に船の難破でマヤ地域に辿りつき、マヤ語を話すようになっていたスペイン人のヘロニモ・デ・アギラル、もう一人は、マヤ語とナワトル語を解する先住民女性マリントイン（マリンチェ、ドニャ・マリナ）であった。

10) モテクソマ・ショコヨトルの死因や遺体の行方についてははっきりしない。概して征服者側の史料では、メシーカ人をなだめようと言説した際に彼らから受けた投石が死因だったとされる。一方、メシーカ人側の史料では、投石は致命傷ではなく、スペイン人に刺されて死亡したとされている。

11) 地名メシコの語源には諸説ある。指導者だった「メシ (Mexi) またはメシトリ (Mexitli) の地」や、「月 (metztli) の中心 (臍, xictli) の場所」などの解釈がある (Robelo 1977: 45; Peñafiel 2013: 465)。

12) ミチョアカン王国および同王国の征服については、必ずしも史料が豊富ではないものの、修道士のヘロニモ・デ・アルカラが編んだ『ミチョアカン報告書』があり、邦訳も存在する (ル・クレジオ 1987)。

13) 当初、メチュワカン市 (Ciudad de Mechuacán) として 1541 年に創設され、1545 年にバジャドリと改称された。

14) この間の詳細な経緯については、ゴニイの研究 (Goñi 2008: 131-233) を参照。

15) 邦訳されているものとして、ホセ・デ・アコスタ (アコスタ 1966)、トリビオ・デ・モトリニア (モトリニア 1979)、アロンソ・デ・ソリタ (ソリタ／ランダ 1982) らの記録がある。

16) 仏語の原版は 1983 年にパリで出版され、西語版は 1989 年に刊行された。

17) この文書とその記述内容については、田辺・大原・井上 (2022 : 331-333) でより詳細に論じている。

18) メキシコ市を中心とするヌエバ・エスパーニャ副王領の管轄下に置かれたフィリピン (スペイン領フィリピン) については、菅谷 (1995 ; 2022) を参照。

19) ただし、18 世紀にはペルー副王領から分離する形で二つの副王領が新たに設置された。サンタ・フェ・デ・ボゴタを中心とするヌエバ・グラナダ副王領とブエノス・アイレスを中心とするリオ・デ・ラ・プラタ副王領である。

20) 例えば、1450～80 年頃のミチョアカンでは、パツクアロ湖周辺のパツクアロ、ツィンツンツァン、イファツィオが三都市による支配を行った。また、ユカタン半島の「マヤパン連合」も同様の概念に基づいた支配体制だった可能性がある (López Austin y López Luján 1999 : 114-115, 137)。

21) チマルパインが記録しているところでは、クルワカン、トーラン (トゥーラ)、オトンパン (オトゥンパ) の三都市による支配は 9 世紀半ばから存在し、1047 (10=葦) 年には、これに代わってクルワカン、コアトリチャン、アスカボツアルコによる三都市同盟が成立した (Chimalpain Cuauhtlehuanitzin 1991 : 12-15)。

22) 1360 年代～1370 年代頃にテノチティトランの初代の王となったアカマピチトリの出自については、史料の記述にばらつきがあって不明な部分も多い。テパネカ系のアスカボツアルコ出身の人物だったとも、トルテカ系のクルワカン出身者だったともされ

る (Castañeda de la Paz 2013: 129)。

<sup>23)</sup> ただし、チマルボボカ殺害には、後継者となったイツコアトルの一派が関係した可能性も示唆されている (Castañeda de la Paz 2013: 143)。

<sup>24)</sup> この間の経緯については、カスタニェダ・デ・ラ・パス (Castañeda de la Paz 2013: 141-153) やクルエル (Kruell 2021 : 49-72) が詳しく論じている。また、テノチティランやテツコ側の主な史料としては、アルバラード・テソソモクやドゥラン、アルパ・イシュトリルショチトルのクロニカの記述がある (Alvarado Tezozómoc 2021; Durán 1995; Alva Ixtlilxóchitl 2021)。

<sup>25)</sup> トラスカラ人およびテツコ人の情報に基づいた征服に関する語りの具体的な例については、拙稿 (井上 2023) を参照されたい。

<sup>26)</sup> 外務省の国別基礎データによれば、スペインの国土は 50.6 万km<sup>2</sup> (<https://www.mofa.go.jp/mofaj/area/spain/data.html>, 最終閲覧日 2023 年 1 月 6 日)、メキシコのそれは 196 万km<sup>2</sup> (<https://www.mofa.go.jp/mofaj/area/mexico/data.html>, 最終閲覧日 2023 年 1 月 6 日) である。

<sup>27)</sup> メキシコの国立先住民言語研究所 (INALI) による (<https://www.mofa.go.jp/mofaj/area/mexico/data.html>, 最終閲覧日 2023 年 1 月 6 日)。

<sup>28)</sup> 実際、アメリカ各地のスペイン領の正式な呼称は「インディアス」だった。また、アジアとアメリカという広大な地域がインディアスと呼ばれるようになったことから、アジアと区別するために、やがてアメリカを「西方インディアス Indias Occidentales」と呼ぶこともあった。

<sup>29)</sup> 無論、ヨーロッパやメソアメリカといった地政学的・歴史的・文化的な一体性を完全に否定するわけではない。ドイツとスペイン、イタリアとイングランドが異なるのと同様に、マヤとアステカ、サポテカとワステカの人々や文化の違いがあることを認識する必要があるというのが筆者の主張である。

<sup>30)</sup> 当然ながら、メシーカ人と対立していたトラスカラ人にとっての「祖国」はトラスカラそのものであって、メシーカ人の国家やアステカ王国は裏切りの対象となる「祖国」ではない。マリンツィンに関しても同様で、16 世紀時点で存在しないメキシコという国家を外来者 (スペイン人) に売するという行為は、論理的に成立し得ない。

<sup>31)</sup> メキシコのナショナリズムとの関りにおいてメキシコ中央高原の古代文明に中心的役割が付与された点は、考古学者の観点から嘉幡 (2019 : 32-39) も指摘しており、詳しい歴史的な解明が必要とされる。

<sup>32)</sup> この年、スペインはバルセロナ・オリンピック (夏季大会) を開催したのに加え、セビーリャで万国博覧会を開催した。後者は「アメリカ発見 500 周年」を祝い、「発見の時代」をテーマとして 4 月に開幕し、コロンがサン・サルバドル島に達した 10 月 12 日に閉幕した。

## 参考文献

### 〔邦文〕

アコスタ

- 1966 『新大陸自然文化史』増田義郎訳、岩波書店（大航海時代叢書第Ⅰ期）、上下巻。

井上幸孝

- 2018 「17世紀初頭の先住民クロニカに見るアステカ征服——アルバ・イシュトリルショチトル『第13報告書』のテツココ王に関する記述をめぐって——」『専修人文論集』第103号、163～183頁。
- 2023 「アステカ征服をめぐる多様な視点——トラスカラ、テツココに関する先住民クロニカから——」『専修人文論集』第112号、197～224頁。

オゴルマン、エドモンド

- 1999 『アメリカは発明された——イメージとしての1492年』青木芳夫訳、日本経済評論社。

嘉幡茂

- 2019 『テオティワカン——「神々の都」の誕生と衰退』雄山閣。

コルテス、エルナン

- 2015 『コルテス報告書簡』伊藤昌輝訳、法政大学出版局。

菅谷成子

- 1995 「フィリピンとメキシコ」、歴史学研究会編『講座世界史1 世界史とは何か——多元的世界の接触の転機』、東京大学出版会、203～228頁。
- 2022 「スペインによるフィリピン支配」、安村直己（責任編集）『岩波講座 世界歴史14 南北アメリカ大陸 ～17世紀』、岩波書店、214～215頁。

ソリタ／ランダ

- 1982 『ソリタ ヌエバ・エスパニャ報告書／ランダ ユカタン事物記』  
小池佑二・林屋永吉訳、岩波書店（大航海時代叢書第Ⅱ期）。

田辺加恵・大原志麻・井上幸孝

- 2022 『聖ヤコブ崇敬とサンティアゴ巡礼——中世スペインから植民地期  
メキシコへの歴史的つながりを求めて』春風社。

ディーアス・デル・カスティージョ，ベルナル

- 1986-87 『メキシコ征服記』小林一宏訳、岩波書店（大航海時代叢書エク  
ストラシリーズ）、全3巻。

ボド，ジョルジュ／ツヴェタン・トドロフ

- 1994 『アステカ帝国滅亡記——インディオによる物語』菊池良夫・大谷  
尚文訳、法政大学出版局。

モトリニア

- 1979 『ヌエバ・エスパーニャ布教史』小林一宏訳、岩波書店（大航海時  
代叢書第Ⅱ期）。

ル・クレジオ，J. M. G.（原訳）

- 1987 『チチメカ神話——ミチョアカン報告書』望月芳郎訳、新潮社。

レオン＝ポルティエヤ，ミゲル

- 1994 『インディオの挽歌——アステカから見たメキシコ征服史』山崎眞  
次訳、成文堂。

## 〔欧文〕

Acosta, Josef de

- 2008 *Historia natural y moral de las Indias*. Ed. de Fermín del Pino-Díaz,  
Madrid, Consejo Superior de Investigaciones Científicas.

Alcalá, Jerónimo de

- 1988 *La relación de Michoacán*. Ed. de Francisco de Miranda, México, Secretaría de Educación Pública.

Alva Ixtlilxochitl, Fernando de

- 2021 *Cuatro obras históricas de Fernando de Alva Ixtlilxóchitl*. Ed. de Sergio Ángel Vásquez Galicia, México, Universidad Autónoma Metropolitana, 2 vols.

Alvarado Tezozómoc, Hernando

- 2021 *Crónica mexicana. Manuscrito Kraus 117*. Coord. de José Rubén Romero Galván, ed. de Gonzalo Díaz-Migoyo, México, Universidad Nacional Autónoma de México.

Baudot, Georges, y Tzvetan Todorov

- 1989 *Relatos aztecas de la Conquista*. México, Consejo Nacional para la Cultura y las Artes / Grijalbo.

Castañeda de la Paz, María

- 2013 *Conflictos y alianzas en tiempos de cambio: Azcapotzalco, Tlacopan, Tenochtitlan y Tlatelolco (siglos XII-XVI)*. México, Universidad Nacional Autónoma de México.

Chimalpain Cuauhtlehuanitzin, Domingo Francisco de San Antón Muñón

- 1991 *Memorial breve acerca de la fundación de la ciudad de Culhuacan*. Ed. de Víctor Manuel Castillo Farreras, México, Universidad Nacional Autónoma de México.
- 2003 *Séptima relación de las Différentes Histoires Originales*. Ed. de Josefina García Quintana, México, Universidad Nacional Autónoma de México.

Cortés, Hernán

- 1994 *Cartas de relación*. Nota preliminar de Manuel Alcalá, México, Porrúa, 18ª edición.

Díaz del Castillo, Bernal

- 1982 *Historia verdadera de la conquista de la Nueva España*. Ed. de Carmelo Sáenz de Santa María, Madrid, Instituto “Gonzalo Fernández de Oviedo”, Consejo Superior de Investigaciones Científicas.

Durán, Diego

- 1995 *Historia de las Indias de Nueva España e islas de Tierra Firme*. Ed. de Rosa Camelo y José Rubén Romero Galván, México, Consejo Nacional para la Cultura y las Artes, 2 tomos.

Frías, Valentín F.

- 1906 *La conquista de Querétaro. Obra ilustrada con grabados que contiene lo que hasta hoy se ha escrito sobre tan importante acontecimiento, así como Documentos inéditos de bastante interés para la historia de Querétaro*. Querétaro, Imprenta de la Escuela de Artes de Señor San José.

Goñi, Guillermo

- 2008 *Las conquistas de México y Yucatán*. México, Instituto Nacional de Antropología e Historia.

Kruell, Gabriel Kenrick

- 2021 *El valle de Anáhuac en el siglo XV. La conquista del imperio tepaneca y el surgimiento de la Triple Alianza*. México, Universidad Nacional Autónoma de México.

León-Portilla, Miguel

- 1964 *El reverso de la Conquista. Relaciones aztecas, mayas e incas*. México, Joaquín Mortiz.
- 1992 *Visión de los vencidos. Relaciones indígenas de la Conquista*. México, Universidad Nacional Autónoma de México, 13ª edición.

López Austin, Alfredo, y Leonardo López Luján

- 1999 *Mito y realidad de Zuyuá. Serpiente Emplumada y las transformaciones*

*mesoamericanas del Clásico al Posclásico*. México, El Colegio de México/  
Fidecomiso Historia de las Américas / Fondo de Cultura Económica.

López de Gómara, Francisco

1979a *Historia general de las Indias y Vida de Hernán Cortés*. Ed. de Jorge  
Gurria Lacroix, Caracas, Biblioteca Ayacucho.

1979b *Historia de la conquista de México*. Ed. de Jorge Gurria Lacroix, Caracas,  
Biblioteca Ayacucho.

Matthew, Laura E. and Michel R. Oudijk

2007 *Indian Conquistadors: Indigenous Allies in the Conquest of Mesoamerica*,  
Norman, University of Oklahoma Press.

Motolinía, Toribio de

1985 *Historia de los indios de la Nueva España*. Ed. de Georges Baudot,  
Madrid, Castalia.

Muñoz Camargo, Diego

1998 *Historia de Tlaxcala*. Ed. de Luis Reyes García y Javier Lira Toledo,  
México, Universidad Autónoma de Tlaxcala / Centro de Investigaciones y  
Estudios Superiores en Antropología Social / Gobierno del Estado de  
Tlaxcala.

Navarrete Linares, Federico

2019 *¿Quién conquistó México?* México, Penguin Random House.

Oudijk, Michel R. y Matthew Restall

2013 *Conquistas de buenas palabras y de guerra: una visión indígena de la  
conquista*. México, Universidad Nacional Autónoma de México.

Peñafiel, Antonio

2013 [1895] *Nomenclatura geográfica de México*. Estado Libre y Soberano de  
Hidalgo / Miguel Ángel Porrúa.



Prescott, William H.

1873 *The Conquest of Mexico*. Boston, Dana Estes & Company, 3 vols.

Ricard, Robert

1986 *La conquista espiritual de México. Ensayo sobre el apostolado y los métodos misioneros de las órdenes mendicantes en la Nueva España de 1523-1524 a 1572*. México, Fondo de Cultura Económica.

Robelo, Cecilio A.

1977 “Toponímicos”, en Antonio Peñafiel, *Nombres geográficos de México*, México, Cosmos, pp. 9-80.

Sahagún, Bernardino de

1979 *Códice Florentino. Manuscrito 218-20 de la Colección Palatina de la Biblioteca Medicea Laurenziana*. Ed. facsimilar, México, Secretaría de Gobernación / Archivo General de la Nación.

Schroeder, Susan

2007 “Introduction”, in Laura E. Matthew and Michel R. Oudijk (eds.), *Indian Conquistadors: Indigenous Allies in the Conquest of Mesoamerica*, Norman, University of Oklahoma Press, pp. 5-27.

Tena, Rafael (paleografía y traducción)

2004 *Anales de Tlatelolco*. México, Consejo Nacional para la Cultura y las Artes.

Zorita, Alonso de

1963 *Breve y sumaria relación de los señores de la Nueva España*. Ed. de Joaquín Ramírez Cabañas, México, Universidad Nacional Autónoma de México.

1999 *Relación de la Nueva España*. Ed. de Ethelia Ruiz Medrano, Wiebke Ahrndt y José María Leyva, México, Consejo Nacional para la Cultura y las Artes, 2 tomos.